

トルコ JICA 帰国研修員同窓会「第 3 回 アクションプラン・コンテスト」の開催

2018 年 3 月 5 日

JICA のトルコ共和国への協力は 1959 年の研修員受け入れから始まりました。以来、公的機関を中心とした約 4000 人が本邦研修に参加し、日本で得た知見を帰国後のトルコの国造りに役立てています。

各研修員の帰国後の取り組みを奨励し、より多くの好事例を発掘するために、JICA トルコ事務所と JICA 帰国研修員同窓会は、2015 年度から毎年、課題別研修や青年研修に参加した研修員を対象に「アクションプラン・コンテスト」を開催しています。これは、本邦研修の集大成として各自が作成するアクション・プランを、帰国後どのように実現させたか、取り組みの内容や公益性等を考慮して審査し、入賞者に活動紹介の場を設け授賞式を行うものです。

2018 年度は 6 件の応募、入賞者は 4 名

2017 年度第 3 回アクションプラン・コンテスト授賞式は、2018 年 3 月 3 日、在トルコ日本大使館の主催する「日本祭り」の一環として、日本国特命全権大使宮島昭夫大使と、JICA 帰国研修員でもある国会議員（日本トルコ議員連盟会長）のアルパスラン・カワクルオール会長の臨席のもと、首都アンカラにて開催されました。

毎年同コンテストには、素晴らしい取り組みが多々応募されるため、審査は非常に難航します。また実際に取り組みが実現されているかの裏付けも取らなければならない、最終的な結果は厳密な精査を経て発表されます。今回は計 6 件の応募のうち、上位 3 位までの入賞者は 4 名となりました。それぞれ、高齢者や社会的弱者への取り組み、防災意識の向上等、トルコにて目下必要とされている各課題解決に資する活動であり、各分野へのモデルとして波及してゆくことが期待されます。



1 宮島大使の開催挨拶



2 安井トルコ事務所長の開会挨拶



3 日土議員連盟会長の Kavaklioglu 国会議員も臨席（同氏も JICA 帰国研修員）

日本で得た知見をトルコの国造りに活用させる

それでは、今年度入賞した 4 名の発表を簡単にご紹介しましょう。

第 1 位

アスラン・メフメト・チョシュクンさん（首相府災害緊急事態管理庁（AFAD）テキルダール県支局職員）

参加研修： 2016 年度 課題別研修「防災主流化の促進」（JICA 関西センター）

アクション・プラン内容： 障がい者や高齢者のための防災トレーニング

アスラン氏は本邦研修にて、弱者層が震災後の悪影響を物理的にも社会的にも最も被っている現状を知り、日本での障がい者や高齢者を対象とした充実した防災活動に感銘を受けたそうです。彼は帰国後、テキルダール県内の他の公的機関と連携し、県内 16923 人の障がい者や高齢者を対象に「基礎防災意識向上」「防災における応急措置」のトレーニングを精力的に実施しています。その取り組みが評価され、今回のアクションプラン・コンテストでは見事優勝しました。



4 宮島大使より記念品を受賞するアスラン氏



5 研修から帰国後、県内の弱者を対象に地域連携のもと防災訓練を行っている。

第2位

セルカン・デミレルさん(コンヤ特別市消防局職員)

参加研修: 2016年度 青年研修「広域消防・救急救命」(JICA 北海道(帯広)センター)

アクション・プラン内容: 防災意識向上のため小学校への出張防災訓練、消防局への小学生の社会見学受け入れ

十勝地方の帯広や足寄の消防局で広域消防や防災につき学んだセルカン氏は、日本では子供達の消防・防災意識を高める取り組みが盛んであることに注目し、同じコンヤから参加した消防局職員のラティフ氏、カディル氏と共にアクションプランを作成しました。そして、帰国後、県の教育局と連携し小学校への出張防災訓練を開始する一方、社会見学の一環として小学生を消防局に受け入れ、寸劇等の手法を使い災害時の対応等のトレーニングを行っています。セルカンさんは、2週間ほどの短い滞在中に、受け入れ先の十勝地域の消防士達とすっかり意気投合し、別れる際は涙し、お互いのユニフォームを交換するほど親睦を深めたことについて、生涯忘れることのできない思い出だと語りました。



6 安井 JICA トルコ事務所長より記念品を受賞するセルカン氏



7 十勝方面の消防局と絆を深めたことはかけがえのない思い出という。

第3位

ナズル・デミルさん(カイセリ県フェラヒエ郡郡長)

参加研修: 2016年度 国別研修「地方行政官の地域開発に係る能力向上」(JICA 北海道(札幌)センター)

内容: 「村落の女性向け地域特産物加工講座開講とマーケティング支援」

トルコでは、内務省から任命された県知事や郡長が中央政府からの全権監督として各地方行政にあたります。その任務は地域開発から治安維持、教育や保健、農業等の管理と幅広く、各分野の知見はもちろん、住民や各種関係機関をまとめるリーダーシップと調整力も求められます。郡長というポジションは将来の内務省高官、知事候補であり、トルコではエリートの特徴なのです。JICA は内務省からの要請を受け、郡長や副知事の地域開発に係る能力を向上させるための研修を、北海道センターの支援を受け実施しています。

今回第3位を受賞した若手女性郡長として頭角を現すナズルさんも、2017年の1月に同研修に参加しました。北海道開

発局やはまなす財団の協力により、北海道の様々な地域振興の取り組みや市民参画のモデルを見て学ぶ中、特に各地域の特色や資源を生かしたマーケティング手法や地域振興に影響を受けたそうです。帰国後、自分の任地では何が資源となりうるかを分析し、村落の女性達の所得向上を目指す事業を一念発起で立ち上げました。まずは地域伝統食文化を守るため、その加工につき女性向け講座を開設、そして講座受講生の共同組合を設立、加工品をブランド化するためのパッケージ、商標登録、マーケティングの補助。これら一連の活動を地域の各機関を連携させ、実施させています。ナズルさんの「女性である自分は、まずは女性のために何か行動を起こしたかった。例え政府からの支援がなくても、地域一団となり、自分達の手で自立発展させていきたい。」という力強いメッセージは参加者にも強く伝わりました。



8JICA 帰国研修員同窓会会長 Prof.DrATAR より賞状を受賞するナズルさん



9 地域資源を利用して女性の所得向上を目指す農産物加工の取り組みを地域として開始

第3位

バイラム・トゥルケル区長(キリス県ポラテリ郡郡長)

参加研修: 2016 年度 国別研修「地方行政官の地域開発に係る能力向上」(JICA 北海道(札幌)センター)

内容:「単身生活する高齢者への社会参画支援」

同じく3位に入賞したバイラムさん。実は彼も前述のナズルさんと同じ研修に参加した若手郡長の一人です。彼は現在、シリア国境の難民問題や治安問題を多く抱える地域の郡長として任務にあたっていますが、今回の受賞の知らせを受け、アンカラまで駆けつけてくれました。ナズルさん同様、北海道の研修に参加し、様々な側面から多くのことを学んだとするバイラムさん。例えば、本来ネガティブな要素でもある雪を利用し、雪まつりという観光資源に転化させる付加価値付の考え方、学校で生徒が掃除や給食の配膳を自分達で行っている規律と自主性(これは、自分達の地域でも試みているようです)、そして市民団体と協力したきめ細やかな地域行政サービス、無償でのボランティア活動等、見るもの、聞くもの、すべて目からうろこが落ちる思いだったとのこと。中でも彼は、日本が高齢者や弱者を積極的に社会参画させていることに感銘し、これを自分のアクション・プランとしました。地域で単身生活をする高齢者の負担を減らし、社会参画させるために、若者たちにトレーニングを受講させ、社会的一体性を生み出すプロジェクトで、これは開発省からも資金支援を受け実施されています。



10JICA 帰国研修員同窓会会長 Prof.DrATAR より賞状を受賞するバイラム氏



11 学校訪問で見た掃除や給食の配膳は、是非トルコでも取り組むべきと熱弁するバイラム氏

日本での一つ一つの出遭いが、揺るぎない親日感情につながる

今回の受賞者に限らず、トルコでは日本での学びを基に色々な取り組みを行っている帰国研修員が沢山います。各研修員が本邦研修にて効率的に学びを得、そして日本に対しての良い思い出を胸に大の親日派として帰ってくることは、ひとえに日本の国内機関の用意する充実した研修カリキュラムと真心ある受け入れ態勢のおかげだと思えます。

トルコ事務所及び帰国研修員同窓会は帰国研修員一人一人との関係を大切に、日本での経験を良い形でトルコの国造りに活かす活動をこれからも奨励してゆきたいと思えます。

この場を借りて、本邦研修に携わってくださっている国内機関の皆様、実施機関や受け入れ先の皆様に心から感謝申し上げます。